The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自然言語への理論的アプローチ（冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2024, 2023
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97290
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語文化共同研究プロジェクト2023

自然言語への理論的アプローチ

越　智　正　男
山　田　彬　尭
ヤ　ン　ム　イ
由　本　陽　子

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻

2024

まえがき

本報告書は、大阪大学人文学研究科言語文化学専攻に所属する教員と大学院生によって構成されている共同プロジェクトによる 2023 年度の研究成果の一部をまとめたものである。今年度もこれまでに引き続き、本研究プロジェクトのメンバーを中心とする理論言語学の研究会が定期的に開催され、毎回活発な議論や意見交換がなされてきた。毎回、本プロジェクトの報告書に収録されている論文の多くが研究会での議論を反映したものとなっているが、今回は大学院生メンバーからの本報告書への寄稿がなかったことは残念であった。なお、本研究プロジェクトのリサーチ・アシスタントである邱暁石さんには研究会の円滑な運営や本報告書の刊行のためにご尽力いただいた。この場を借りてお礼を申し上げる。

三藤　博（2023 年度研究プロジェクト代表者）

言語文化共同研究プロジェクト 2023

自然言語への理論的アプローチ

目次

越智正男
日本語と中国語の複数形態素の統語的性質についての考察 1

山田彬尭
尊敬否定命令文「…てくださるな」から「…ないでください」への
歴史変化 11

ヤンムイ
A note on inferential evidentials in Qaraqalpaq 21

由本陽子
身体部分名詞を結合した日本語の[N+V]複合語の特徴 31

日本語と中国語の複数形態素の統語的性質についての考察*

越智正男

1. はじめに

本稿は現在進行中の日本語と中国語における複数形態素（PL マーカー）の統語的性質に関する調査の経過報告である。Li (1999) によれば，中国語の PL マーカーと類別詞は（容易には）共起しないが，日本語ではそのような制約が見られない (Nakanishi and Tomioka 2004)。また，PL マーカーと定性効果 (definiteness effects) に関しても両言語では違いがある。さらに，本稿では扱わないが，韓国語の PL マーカーと類別詞 (Park 2022) にも研究の範囲を拡張すると，さらに多くの理論的問いが出てくる。

このような理論的背景を踏まえて，本稿は日本語と中国語の PL マーカー（と類別詞）について筆者が新たに収集したデータを中心に報告する。なお，中国語のデータに関しては話者間で判断が揺れるものもあり，今後さらなる調査が必要である。

2. 日本語と中国語の複数形態素（PL マーカー）について

先行研究で指摘されてきたように、日本語（や韓国語、中国語）の PL マーカーには複数読み (additive/sum reading) と連結読み (associative reading) がある。例えば，(1a) のように「たち」を使用すると，複数読みが容易にとれる（連結読みも可能であろう）。(1b) のように「ら」を使用すると，多くの話者にとって連結読みが強い傾向がある（ただし，複数読みも可能であろう）。一方，名詞主要部が固有名詞の場合は「たち」の場合でも「ら」の場合でも連結読みが強い。しかし，「たち」の場合は複数読みも可能であろう。特に (3a) のように，固有名詞が普通名詞のような特徴（この場合は発明家としての性質や才能を有する人）を表す場合に複数読みは顕著になるであろう。一方，(3b) の場合，複数読み解釈を得るのはかなり難しいと感じる話者が多い。

(1) a. その村の学生たちを招待した。
　　b. その村の学生らを招待した。
(2) a. 太郎たちを招待した。
　　b. 太郎らを招待した。

* 本稿は The Workshop on Theoretical East Asian Linguistics 13 (Ochi 2023a) 及び The Chinese University of Hong Kong Linguistic Seminar (Ochi 2023b) の内容を踏まえて現在行っている調査の経過報告である。上記のイベントの参加者（特に辰己雄太氏，Lawrence Cheung 氏，Chenghao Hu 氏）に感謝する。また，Haowen Zheng 氏には多くのデータに対して時間を割いて答えていただいた。ここに深く感謝を申し上げる。本研究は科学研究費基盤研究 (C) (No. 20K00679) の助成を受けて行われている。

(3) a. 現代のエジソンたちを招待した。
b. 現代のエジソンらを招待した。

以下の議論においては，「ら」が持つ連結読みの度合いの強さに着目して議論を進める。

この PL マーカーの 2 つの解釈については多くの先行研究がある。例えば，Nakanishi (2020) ではこの２つの解釈を統一的に分析する試みが成されている。その一方で，日本語の PL マーカーには「方」のように連結読みを持たない PL マーカーも存在することが Ueda and Haraguchi (2008) により指摘されている。

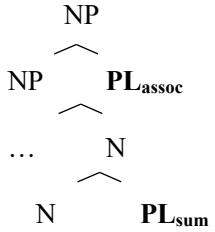
(4) 先生方を招待した。

Ueda and Haraguchi によれば，連結読みの PL マーカー (PL_{assoc}) は複数読みの PL マーカー (PL_{sum}) と共起し，さらに前者は後者に後続する。筆者が行ったインフォーマント調査に限れば多くの話者が (5a) のような例文を容認した（ただし，容認しない話者もいた）。

(5) a. その村の学生たちらを招待した。
b. ??その村の学生らたちを招待した。

Ueda and Haraguchi (2008) によれば，日本語の PL_{sum} は NP と併合し，PL_{assoc} は DP と併合する。Ochi (2023b) においては，日本語が NP 言語である (Chierchia 1998, Bošković 2008) との立場を取り，Ueda and Haraguchi の仮説を採用した上で，PL_{sum} は名詞主要部と併合し，PL_{assoc} は名詞句全体と併合するとの可能性を探究している。

(6) （日本語）



中国語に目を向けても，PL_{sum} と PL_{assoc} の棲み分けがなされていることがわかる。まず，Li (1999) 等の先行研究で述べられているように，PL マーカーの *-men*（们）は固有名詞の場合には 2 通りの解釈を持つが，普通名詞についた際には連結読みを生み出さない。例えば (9) は複数読みしか許さない。

(7) Zhangsan-men

Zhangsan-PL

a. a group of people with the name/characteristics of Zhangsan （複数読み）

b. * a group of people consisting of Zhangsan and others （連結読み）

(8) Zhangsan ta-men

Zhangsan he-PL

a. *a group of people with the name/characteristics of Zhangsan （複数読み）

b. a group of people consisting of Zhangsan and others（連結読み）

(9) rìběn xuéshēng-men

Japan student-PL

a. Japanese students （複数読み）

b. * a group of people consisting of Japanese students and others （連結読み）

一方で，中国語の *-děng*（「等」）を用いると連結読みが生じ，複数読みは生じない（Chenghao Hu 氏の私信による）。なお，*-děng* に後続して *–rén*「人」が随意的に現れる。[1]

(10) Zhangsan-děng(-rén)

Zhangsan-PL_{assoc}-person

a. *a group of people with the name/characteristics of Zhangsan （複数読み）

b. a group of people consisting of Zhangsan and others（連結読み）

(11) rìběn xuéshēng-děng(-rén)

Japan student-PL_{assoc}-person

a. *Japanese students （複数読み）

b. a group of people consisting of Japanese students and others （連結読み）

つまり，日本語の「たち」や「ら」が普通名詞に付いた場合に 2 つの解釈を持つ（ただし，「ら」は連結読みが非常に強い）のに対して，中国語の普通名詞の場合は，*-men* と *-děng* という異なる PL マーカーを用いて 2 つの解釈を表していることになる（ただし，先述の通り，*-men* が固有名詞についた場合には 2 通りの解釈が生じる）。そして，興味深いことに，Hu and Pan (2024) によると，日本語の (5) と同様の対比が中国語でも見られる。[2]

[1] Tatsumi (2017) によれば，PL_{assoc} は常に 2 つの名詞句を選択し，その内の 1 つは音形を持たない複数解釈の名詞ということになる。ここでの *–rén* はこの複数解釈を受ける名詞の具現化とも考えられる。

[2] ただし話者間で容認性にばらつきがあるようである。この点はさらなる調査が必要である。

(12) a. rìběn xuéshēng-men-děng
Japan student-PL_{sum}-PL_{assoc}
'a group of people consisting of Japanese students and others'

b. *rìběn xuéshēng-děng-men
Japan student-PL_{assoc}-PL_{sum}

ここで, PL_{assoc} の *-děng* が持つ性質について触れておきたい。先行研究において, *-men* に定性の効果があることが指摘されている。例えば (13a) にあるように, *-men* は *you*「有」を用いた存在構文に出現しない（Li (1999) を参照されたい）。筆者が確認したところ, *-děng* もこの構文に出現できない。このことは, *-děng* が *-men* 同様に定性の効果を持つことを示唆していると思われる。[3]

(13) a. *you xuéshēng-men
have student-PL_{sum}
'there are students.'
b. *you xuéshēng-děng
have student-PL_{assoc}
'there is a group of people consisting of students and others.'

一方, Nakanishi and Tomioka (2004) が指摘するように, 日本語の「たち」は不定の解釈が可能である。そして (14c) が示すように,「ら」も不定の解釈が可能である（(14b) を不自然と感じる話者にとっても, (14c) は自然な文であろう）。一方, 中国語の *-děng* は同様の例文には出現しにくい。話者によっては, *-men* を用いた (15b) の容認性はそれほど低くないようであるが, そのような話者でも (15c) は容認されない。このことも, *-děng* が不定の解釈を持たないことを示しているように思われる。

(14) a. この店は毎日阪大生で賑わっている。
b. ?この店は毎日阪大生たちで賑わっている。

---

[3] 興味深いことに, (i) のような *you* 構文は適格である（Chenghao Hu 氏の私信による）。本稿の最後で述べるが, このような場合の名詞句は (ii) にあるように, 独立した 2 つの名詞句から構成されている複合名詞句と考えられる。この複合名詞句の主要部分は NP2（*shi-ge lingdaoren* 'ten leaders'）であり, *-děng* は NP1 の要素であるため, 定性の問題が生じない。

(i) You Zhangsan-deng shi-ge lingdaoren chuxi-le huiyi.
have Zhangsan-PL ten-CL leader attend-PFV meeting
'Ten leaders, including Zhangsan, attended the meeting.'
(ii) { {$_{NP1}$ Zhangsan-deng }, {$_{NP2}$ shi-ge lingdaoren } }

c. この店は毎日阪大生らで賑わっている。

(15) a. Zhè-jiā diàn měi-tiān dōu yǒu bǎn-dà-shēng lái.
This-CL shop everyday DOU have Osaka.U student come
'Osaka University students come to this shop everyday.'

b. */(?) Zhè-jiā diàn měi-tiān dōu yǒu bǎn-dà-shēng-mén lái.
This-CL shop everyday DOU have Osaka.U student-PL come
'Osaka University students come to this shop everyday.'

c. *Zhè-jiā diàn měi-tiān dōu yǒu bǎn-dà-shēng-děng lái.
This-CL shop everyday DOU have Osaka.U student-PL come
'Osaka University students and others come to this shop everyday.'

3.類別詞表現との共起関係について

次に，PL マーカーが「数詞+類別詞」と共起する場合の制約について考察する。まず，類別詞の分布について簡単に確認しておく。日本語の場合,「数詞+類別詞」が名詞句内で主名詞の前に生起する場合（前置型），名詞句内で名詞の後ろに生起する場合（後置型），及び遊離型があることが知られているが，現代中国語の「数詞+類別詞」の場合は，名詞主要部の前に位置する形（前置型）が一般的である。しかし，(16b) のような後置型も話者に確認すると比較的容認度が高い。

(16) a. Wo mai-le san-ben shu.
I buy-Asp 3-CL book
'I bought three books.'

b. Wo mai-le shu san-ben.
I buy-Asp book 3-CL
'I bought three books.

(16a) のような前置型に関しては数多くの先行研究があるが，(16b) のような後置型に関してはあまり研究されていないようである。これは，前置型類別詞と比べて後置型類別詞表現の頻度がかなり低い (Shi and Zhuo 2020) ことにもよるであろう。

中国語の主語には不定の解釈を持つ要素が生起できないことが指摘されているが，この点を踏まえて前置型類別詞と後置型類別詞の振る舞いを確認してみる。

(17) a. *Sange xuéshēng zai xuexiao shoushang le. (pre-nominal)
three-CL student at school hurt PAR
'Three students were hurt at school.'

b. *Xuéshēng sa-ge zai xuexiao shoushang le. (post-nominal)
student three-CL at school hurt PAR
'Three students were hurt at school.'

(18) a. You san-ge xuéshēng zai xuexiao shoushang le.
have three-CL student at school hurt PAR
'There are three students hurt at school.'

b. *You xuéshēng sange zai xuexiao shoushang le.
have student three-CL at school hurt PAR
'There are three students hurt at school.'

(17a) と (18a) は Li (1998) からの例文である。(17a) は主語が不定のため，容認性が下がるが，(18a) のような *you*（有）存在構文は可能である。(17b) は主語位置に後置型類別詞を用いた作例である。筆者が確認したところ，このような例文も (17a) 同様に容認されない。このことは，中国語の後置型類別詞表現が不定解釈を持つことを示唆する。興味深いのは，(18b) の非適格性が示すように，後置型類別詞表現が *you*（有）存在構文でも認可されないという点である。Li (1998) によれば，不定の類別詞表現には「個体読み (individual denoting)」の場合と「量化読み (quantity denoting) 」の場合があり，*you* 構文は前者の読みを強要するという（詳細は Li (1998) を参照されたい）。この点を踏まえると，(18) に見られる対比は，前置型類別詞表現には個体読み（及び量化読み）があるのに対して，後置型類別詞表現は量化読みに限定されるということを示唆しているのかもしれない。

この点を踏まえて，日本語と中国語の PL マーカーと類別詞の共起関係について触れる。まず日本語の場合は，「数詞+類別詞」が名詞の前にある場合（前置型）も名詞の後ろにある場合（後置型）でも「たち」や「ら」との共起は可能である。

(19) a. 私は 100 人の生徒たちを招待した。
b. 私は 100 人の生徒らを招待した。

(20) a. 私は生徒たち 100 人を招待した。
b. 私は生徒ら 100 人を招待した。

筆者が確認した限りでは，(19a) では複数読みが非常に強く，(19b) は連結読みが顕著である（(19b) は「100 人の学生とそれ以外の人（々）」の解釈が顕著であると思われる）。(20) の場合も同様であろう（(20b) は「生徒とそれ以外の人で合計 100 人」の解釈となる）。

これに対して，中国語の *-men* は前置型 (pre-nominal) の「数詞+類別詞」と共起しないことが Li (1999) で指摘されている。*-men* が前置型の「数詞+類別詞」と共起する際にどの程度容認性が下がるかという点については個人差があるようである。例えば，筆者が確認した話者の場合には，*-men* を用いた (21b) と *-děng* を用いた (21c) は共に容認性が下がる

が、この傾向は (21c) の方が顕著であった。

(21) a. Wǒ yāoqǐng-le shí-ge xuéshēng.
1SG invite-PERF ten-CL student
'I invited ten students.'

b. ?Wǒ yāoqǐng-le shí-ge xuéshēng-men.
1SG invite-PERF ten-CL student PL_{sum}
'I invited ten students.'

c. *Wǒ yāoqǐng-le shí-ge xuéshēng-děng(-rén)
1SG invite-PERF ten-CL student-PL_{assoc}-person
'I invited a group of people consisting of ten students and others.'

その一方で，Hu and Pan (2024) は，(21b) の容認性が低いのに対して (21c) のような例文は適格であると報告しており，この点については今後さらに調査が必要である。

次に，中国語の後置型類別詞と PL マーカーの共起について考察する。なお，後置型の「数詞+類別詞」の後には *rén*（人）が随意的に現れる（脚注 1 も参照されたい）。Hu and Pan (2024) によると，この *rén* の有無は容認性判断に影響を与えない。しかし，筆者がインフォーマントに確認したところ，*rén* の有無が容認性に影響を与えているという結果が出た。

(22) a. ?bǎn-dà-shēng 100-ge rén
OsakaU student 100-CL person
'100 Osaka University students'

b. *bǎn-dà-shēng-men 100-ge rén
OsakaU student-PL_{sum} 100-CL person
'100 Osaka University students'

c. bǎn-dà-shēng-děng 100-ge rén
OsakaU student-PL_{assoc} 100-CL person
'a group of 100 people consisting of Osaka University students and others'

(23) a. bǎn-dà-shēng 100-ge
OsakaU student 100-CL
'100 Osaka University students'

b. ?bǎn-dà-shēng-men 100-ge[4]
OsakaU student-PL_{sum} 100-CL
'100 Osaka University students'

[4] Li (1999) は (23b) のような例に ＊ をつけているが，ここでは筆者のインフォーマントの容認性判断を載せている。

c. *bǎn-dà-shēng-děng 100-ge
OsakaU student-PL_{assoc} 100-CL
'a group of 100 people consisting of Osaka University students and others'

(22a, b, c) と (23a, b, c) の容認度の違いは，名詞句最右部の *rén* の有無が単なる音韻的操作（削除）によるものではなく，異なる統語構造を反映していることを示唆する。この点については後で考察する。

最後に，PL マーカーが後置型類別詞に後続する場合について考察する。日本語の場合には，PL_{sum} と PL_{assoc} で振る舞いが異なる。(24a) の場合，「たち」を PL_{sum} として解釈する場合には容認性が非常に低いが，(24b) の容認性は高い。一方，中国語の場合には *-men* の場合も，*-děng* の場合も非適格である。

(24) a. *学生 100 人たち
b. 学生 100 人ら
(25) a. *xuéshēng 100-ge-men
student 100-CL-PL_{sum}
'100 students'
b. *xuéshēng 100-ge-děng
student 100-CL-PL_{assoc}
'a group of people consisting of 100 students and others'

(24) のデータに関しては，(6) に示した仮説から説明が可能であろう。この仮説によれば，PL_{sum} は名詞主要部に付加する。従って，「たち」が「学生」に付く「学生たち 100 人」は可能であるが，(24a) は生成されない。一方，PL_{assoc} の「ら」は名詞句全体に付加する要素であるため，「学生 100 人」という名詞句に付加した際に (24b) が出てくる（あるいは「学生」という名詞句に「ら」が付加した場合は「学生ら 100 人」が出てくる）。それでは中国語の方はどうであろうか。(6) の仮説をそのまま中国語に適用すると，(25a) の非適格性は説明が可能かもしれないが，(25b) の非適格性が説明できない。

そこで，ここでは中国語の PL マーカーと後置型類別詞の意味的特性の観点から (25a, b) の非適格性が説明できると提案する。(13) は *-men* に加えて *-děng* も定性の効果を持つことを示唆する。一方，(17) や (18) からは，中国語の後置型類別詞表現は不定の解釈（その中でも量化読み）しか持たないことが示唆される。そうすると，定，不定という異なる意味的性質と結びついた要素同士が同一名詞句領域内に共存することができないことが，(25) の非適格性の原因となっていると考えられる。同様の説明が (23b, c) にも適用できる。

このように考えると，(22c) がなぜ適格なのかという疑問が生じる。この例においても，主名詞+*děng* に後続して類別詞が生起しており，上述の仮説が妥当だとすると，同様の理由

で排除されるべきであるからである。ここで (22) に *rén* が存在することに着目すると，(22) は後置型類別詞表現ではなく, 2 つの独立した名詞句が併合して出来上がった複合名詞句であるという可能性が見えてくる。この考え方によれば，*-děng* は NP1 の要素であるのに対して，*rén* は NP2 の主要部となっており，両者は異なる名詞句領域に属していることになる。

(26) { {$_{NP1}$ bǎn-dà-shēng]-děng}, {$_{NP2}$ yībǎi-ge rén}}

実際に (22c) では *rén* の代わりに *qīngnián*「若者」等の普通名詞を使用することが出来ることからもこの仮説は支持される。

(27) bǎn-dà-shēng-děng 100-ge qīngnián
OsakaU student-PL$_{assoc}$ 100-CL youth
'a group of 100 youth consisting of Osaka University students and others'

紙面の関係でこれ以上の議論には入れないが，日本語の PL マーカーが，Saito (2016, 2018) が言うところの反ラベリング要素 (anti-labeling device) であるという Ochi (2023a, b) の提案を中国語の PL マーカーにも適用すれば，(22b) と (22c) の容認性の差も説明が可能であろう。[5] 実際に Hu and Pan (2024) は Ochi の分析を採用してそのような分析を提示している。

4. おわりに

ここまで見てきたように，日本語と中国語の PL マーカーと類別詞表現には共通点もあれば相違点もある。例えば，両言語の PL マーカーはその解釈によって統語的位置が異なるという点では共通しているが，定性の効果に関しては異なる性質を見せる。両言語の類別詞表現に関しては，前置型と後置型を持つという共通点があるものの，中国語の後置型類別詞

---

[5] なお，(25) の例の PL マーカーの前に *rén* が出てきても非適格のままである。

(i) a. *xuéshēng 100-ge rén-men
student 100-CL person-PL$_{sum}$
'100 students'
b. *xuéshēng 100-ge rén-děng
student 100-CL person-PL$_{assoc}$
'a group of people consisting of 100 students and others'

この類いの例では 2 通りの構成素分析が可能であるが，いずれも同じ理由で排除される。まず，*xuéshēng 100-ge* 'student 100-CL' が NP1，*rén-men/ děng* 'person-PL' が *rén* を主要部とする NP2 であれば，*100-ge* と PL は異なる名詞句に属するため，定，不定の齟齬の問題はないはずであるが，Ochi (2023a,b) が論じているように，2 つの独立した NP を併合して複合名詞句を形成する場合には NP1 に PL マーカーがついている必要がある。同様の理由で，*xuéshēng* が NP1，*100-ge rén*-PL が NP2 という場合も排除される。

表現は頻度や分布が限定的であり，日本語の後置型類別詞表現とは大きく異なるようである。このような点の解明は今後の課題としたい。

参考文献

Bošković, Željko. 2008. What will you have, DP or NP? *Proceedings of the 37th annual meeting of the North East Linguistic Society*, 101-114.

Chierchia, Gennaro. 1998. Reference to kinds across languages. *Natural Language Semantics* 6, 339–405.

Hu, Chenghao and Victor Pan. 2024. Plural markers and classifiers as anti-labelers in Japanese and Chinese. Paper presented at the joint conference of The 26th Seoul International Conference on Generative Grammar (SICOGG 26) and The 18th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL 18), Jeonbuk National University, Jeonju, August 22-24.

Li, Yen-hui Audrey. 1998. Argument determiner and number phrases. *Linguistic Inquiry* 29, 693-702.

Li, Yen-hui Audrey. 1999. Plurality in a classifier language. *Journal of East Asian Linguistics* 8, 75–99.

Nakanishi, Kimiko. 2020. Pseudo-additivity of Japanese plurals. Japanese/Korean Linguistics 27.

Nakanishi, Kimiko and Satoshi Tomioka. 2004. Japanese plurals are exceptional. *Journal of East Asian Linguistics* 13: 39–58.

Ochi, Masao. 2023a. Plurality in Japanese and (Anti-labeling). A paper read at The Workshop on Theoretical East Asian Linguistics 13, May 12, 2023. National Taiwan Normal University.

Ochi, Masao. 2023b. On the syntax of plural elements in Japanese: A labeling approach. Talk given at The Chinese University of Hong Kong, September 26, 2023.

Park, So-Young. 2022. Two types of plurals and numeral classifiers in classifier languages. *Journal of East Asian Linguistics* 31, 139–177.

Saito, Mamoru. 2016. (A) case for labeling: Labeling in languages without phi-feature agreement. *The Linguistic Review: Special issue on labels* 33, 129-175.

Saito, Mamoru. 2018. Kase as a weak head. *McGill Working Papers in Linguistics* 25.

Shi, Heidi H. and Zhuo Jing-Schmidt. 2020. Little cutie one piece: An innovative human classifier and its social indexicality in Chinese digital culture. *Chinese Language and Discourse* 11:1, 31–54.

Tatsumi, Yuta. 2017. A compositional analysis of plural morphemes in Japanese. Proceedings of GLOW in Asia XI, volume 2, 233-241, MITWPL.

Ueda, Yasuki and Tomoko Haraguchi. 2008. Plurality in Japanese and Chinese. *Nanzan Linguistics: Special Issue 3, Vol. 2,* 229–242.

尊敬否定命令文「…てくださるな」から「…ないでください」への歴史変化 *

山田彬尭

1. イントロダクション

敬語は、国語学の伝統において厚い研究の蓄積を有しているだけでなく、その長い研究史の中で、何度も研究の国際化の波を経験している（滝浦 2017, 山田 2021）。とりわけ、2010 年代は、これまで深く研究が進んでいなかった南アジアなどの言語での敬語体系の記述・理論化が進み（Miyagawa 2012, 2017; Portner et al. 2019; Kaur 2017; Alok & Baker 2022; McFadden 2020, Haddican 2018）、通言語的な敬語のバリエーションを整備する動きが近年急速に活発化している（山田 2021, 2023; Yamada 2023; Wang 2023）。

この尊敬語の通言語的バリエーションを捉える視点の一つとして注目されているのが、発話行為表現との相互作用である（山田 2021:86）。例えば、尊敬語は、命令文と適用形と相互作用を持つことが知られている。現代日本語では、尊敬語は、それそのままでは「仰るな！」というような命令形を取ることができず、意図された意味を表すためには「仰らないでください」と適用形「てくださる」を添える必要がある。だが、「尊敬語の命令形には適用形を用いる」という規則は、日本語の歴史において恒常的に維持されてきた絶対的なルールなどではない。例えば、下記の例は、10 世紀の作品からの用例で、この文では尊敬語が命令形の形を取っている。ここから、命令形、適用形との相互作用は、現代日本語の特徴として捉えられるべき性質だと考えらえる。

(1) 今よりかかることのたまふな。（『新編全集 17: 落窪物語』p. 192; 成立年 986 年）

この問題を考える際に、さらに重要なことは、バリエーションは、「適用形」との相互作用の仕方についても存在するということである。上述の通り、現代日本語では、否定命令で尊敬語を用いる場合、(2)a の構文を用いるのに対し、昔の日本語では(2)b のような表現が使われ、語順が異なっている。(3)がこの点を示す用例である。

* 本研究は 2022-2027 年度基盤研究(C)「コーパス言語学と実験言語学の統合：敬語の確率的構文交替を事例に（代表:山田彬尭）」（#22K00507）、および 2021-2026 年、研究拠点形成事業（先端拠点形成型）「自然言語の構造と獲得メカニズムの理解に向けた研究拠点形成（代表：宮本陽一）」（#JPJSCCA20210001）の助成を受けた研究成果の一部である。

(2)　a.（助）動詞＋ないでください　　b.（助）動詞＋てくださる（い）な

(3)　ばばさまひとりでは心ぼそふてならぬゆゑ。もうどこへも行てくださるな。

（『明烏後の正夢』, 滝亭鯉丈/為永春水(作), 1824 年）

それでは、なぜ適用形の表出のさせ方に、このような変化が生じたのだろうか。[1]尊敬語を、単に「主語の指示対象へ敬意を表す表現だ」と理解している限りこの疑問には十全な回答を寄せることができない、ということに注意されたい。聞き手に敬意を持つことと、聞き手に行為を促すということは矛盾しないためである。例えば、「聞き手がどこへも行かない」をお願いするという発話行為は、聞き手に敬意を持っていても理論上は、成立可能である。逆に、このような言語変化に注目し、変化がどのような経緯で進行したのかを詳細に明らかにすることで、現代日本語の尊敬語の特性が明らかになることが期待される。そこで、本稿では、(2)の交替に関し、(4)に示したリサーチクエスチョンを立て、コーパス分析の解析結果から(5)という仮説を立てることに合理性があることを主張する。

(4)　リサーチクエスチョン:

a. (2)b から(2)a に、どのように、変化が進行したのか？

b. (2)b から(2)a に、なぜ変化が生じたのか？

(5)　仮説:

a. 20 世紀初頭に(2)b から(2)a への変化が生じた。　（「どのように」への回答）

b. 終助詞「な」の意味機能（制約）の変化が、旧形式（＝(2)b）の使用を阻害し、新規表現（＝(2)a）の台頭を誘発した。　（「なぜ」への回答）

2.　先行研究

否定命令文の「な」については、先行研究において、次のような点が指摘されている。

2.1 現代日本語

（論点1：選択制限） 否定命令「な」がどのような動詞と用いられるのかについては、古

[1] 現代標準日本語に許容されない「な」の用法に「疑問」用法がある。例えば、(i)では、疑問代名詞「どふ」が使われていること、後続の返答が隣接対（adjacency pair）をなすことから、疑問文を形成すると判断できる（なお、現代日本語では「か」が用いられる）。

(i)　花車大「御火燵の火はどふで御ざりますな」 太夫「よふ御ざります」

『異本郭中奇譚』（底本:『洒落本大成<4>』，作者未詳，1772 年）

くから研究があり、これまで(6)の動詞と接続しないことが指摘されてきた（金田一 1976 [1947]:21; 宮島 1972:424-426; 佐藤 2013:22-27）。

(6) a. 状態：*（机に対し）あるな、*（英会話なんて）できるな、…
b. 第四種の動詞：*そびえるな、*すぐれるな、*ありふれるな、*似るな、…
c. 受け身的意味、偶然の結果：*言いつかるな、*（被害を）被るな、*出会うな、…
d. 生理現象：*老いるな、*疲れるな、*（尿意などを）もよおすな

なお、(6)c の受け身については、すべて非文となるわけではないことに注意されたい。「だまされるな」は許容され、「*批判されるな」は認められないことから、佐藤（2013）では、「だまされる」には、他者からの働きかけに加え、その人物が（選んで）それを信用するという主体的な判断が関与することに注目し、意図性が関与しさえすれば、「な」が接続できることを指摘している。

（論点２：意味機能） 否定命令文のプロトタイプは「廊下を走るな」というような〈禁止〉であるが、より細かく見れば、すでに廊下を走っている人に向けて発せられる〈制止〉や、これから廊下を走ろうとする人に向けられる〈抑止〉のいずれでも解釈が可能である。また、このような〈禁止〉用法の内部におけるバリエーションだけでなく、「人騒がせなことをするな」のような過去に済んでしまったことに対する〈評価的態度〉や「（雨よ）降るな」に見られる〈願望〉など、周辺的な事例の存在も指摘され、意味機能のネットワークについての研究が行われている（仁田 1991、村上 1993、尾崎 2007）。

2.2 中古から近世日本語

否定命令文に関する通時的な研究は、「な…そね」「な…そよ」「な…そ」「な…」「…な」「…そ」「…こすなゆめ」「…なゆめ」「…なよ」「…なえ」「…なや」「…なかれ」といった表現間の使い分けに関する考察が進められてきた（池田 1935；蔵中 1958；今西 1970；細川 1972, 1976, 1977, 1982；田中 2002；森 2013）。中でもその議論の中心は「な…そ」と「…な」の比較である。(i) 終助詞の「…な」（やそのバリアント）が上代から現代にかけて安定して使われているのに対し、「な…そ」という形式（やそのバリアント）は中古末に消滅してしまうこと、(ii) 終助詞「な」は強圧や祈願、訓戒などの話者の強い禁止の感情を表すのに対し、「な…そ」は強い禁止から弱い誂えまで意味に幅があること、(iii) 終助詞「な」も「な…そ」も話し手と聞き手の身分の差には関係しないこと、などが、指摘されてきた。

3. データ

2 節で挙げられた先行研究の知見は、否定命令文を考える上で、重要な視点ではあるが、これらから、速やかに、(4)に掲げた「…てくださるな」から「…ないでください」への変化がどのように、なぜ生じたのか、というリサーチクエスチョンに答えることができるわけではないことに注意されたい。そこで、本稿では、上記の問いに答えるために、下記のような手段で、より詳しく(2)の表現を調査していくこととする。

調査にあたって使用したのは、国立国語研究所が公開している(7)の三つのコーパスである。これらから、中納言上で、(8)の検索式を用い、データを抽出した（アクセス日：2024 年 4 月 21 日）。(7)c は、上代から近代までの(7)a と 2001-2005 年のデータを中心とする(7)b の間の空白期間をつなぐコーパスであるとともに、(7)b 以降のデータも一部含むことから、これらの三つのコーパスの検索結果を対象とすることで、日本語の広範な時代をカバーする通時研究が可能となると判断した。

(7) a. 日本語歴史コーパス（CHJ）
b. 現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）
c. 昭和・平成書き言葉コーパス（SHC）

(8) a.「…てくださるな」　キー: 語彙素="て" AND 後方共起: (語彙素="下さる" AND 活用形 LIKE "終止形%") ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: (語彙素="な" AND 品詞="助詞-終助詞") ON 2 WORDS FROM キー
b.「…ないでください」　キー: 語彙素="ない" AND 後方共起: 語彙素="て" ON 1 WORDS FROM キー AND 後方共起: (語彙素="下さる" AND 活用形 LIKE "命令形%") ON 2 WORDS FROM キー

4. 結果

この結果、CHJ では 62 例（うち「てくださるな」が 30 例）、BCCWJ では 354 例（うち「てくださるな」が 5 例）、SHC で 221 例（うち「てくださるな」が 1 例）の用例が採取された。得られた結果をその用例が取られた作品の成立年によって整理し、新規形式である「…ないでください」の使用率の変化を表したものが図 1 であり、ここから「…てくださるな」の方が歴史的に先に登場した旧形式であることが明白にうかがえる。「…てくださるな」の初例は(9)に示す 1707 年の近松浄瑠璃であり、「…ないでください」の初例はおよそ 2 世紀下った、(10)に示す 1909 年のものである。(10)a では、「どうぞ烟草を喫んで下さるな」という旧形式が同一発話の中で混在して使われており、発話者内変異をうかがわせる。

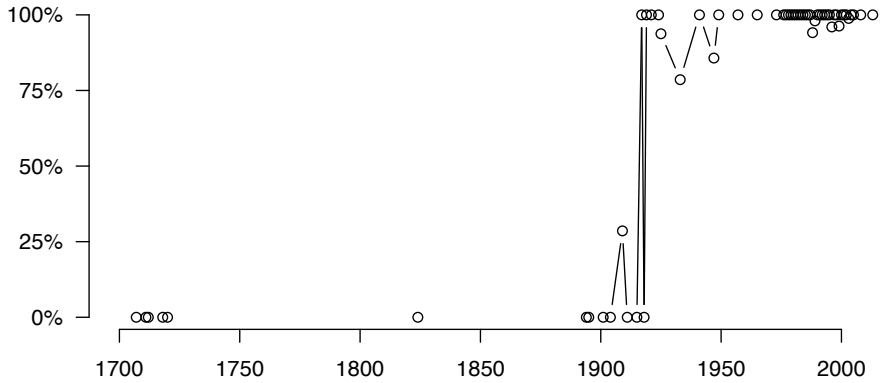


図 1 「…ないでください」の使用率の変化：横軸（作品の成立年）、縦軸（「…ないでください」の使用率）

(9) a. 奥へ入つてくだされもう顔見せてくださるなと両袖を目にあてて（『丹波与作待夜のこむろぶし』, 1707 年）

b. 母様死んでくださるなと嘆く声さへ身にしみて『心中重井筒』, 1707 年）

(10) a. 注意書など見ても、『どうぞ烟草を喫んで下さるな』とか、『どうぞ唾を吐かないで下さい』とか、『手を觸れないで下さい壞れますから』と云ふ風で、最も丁寧に書かれである。（「名士の英吉利觀　三井物産會社理事　小室三吉君談」『太陽』, 1909 年）

b. お定り文句の失禮だとお思召し遊ばさないで下さいな（「東京だより」『女学世界』, 1909 年）

図 1 のグラフを見て分かる通り、新規形式は、初例が観察されたのち、急速に勢力を伸ばし 20 世紀後半には、大勢を占めるに至る。ただし、旧形式が完全に日本語から廃れたとまでは言い難く、21 世紀に入ってからも散発的に用いられることがある点にも注意を向けられたい。例えば、(7)のコーパスの中における旧形式の最も最近の使用例は(11)に示す新聞に含まれていたものである。

(11) アーミテージ氏よ、「日本は入場券を払って観客席にいるだけじゃなくフィールドに出てプレーせよ」などと言ってくださるな。（『朝日新聞』2003 年 6 月 17 日）

ただし、これらの近年の用例は、時期的に見て、「…てくださるな」という用例が生産的に使われた時期に言語習得を行った話者が用いたものとは考えにくい。自然な表現として口をついて出たというよりも、あえて古風な表現を用いることで、何らかの修辞的な効果

を狙ったものであると、捉えるべきであろう。

以上のことから、冒頭に掲げたリサーチクエスチョン（= (4)a）に対しては、次のように回答することが妥当であると思われる。

(12) a.「（助）動詞＋てくださるな」: 18 世紀～20 世紀初頭にかけて使用された

b.「（助）動詞＋ないでください」: 20 世紀初頭から使われ始める

5. 議論

言語変化が論じられるときには、how だけでなく、why という疑問文についても考察をする必要がある。ある言語表現 X が過去に使用され、健全なコミュニケーションを成立させていたのだとすると、そこに追加して、同じ意味機能を担う言語表現 Y が登場する以上、その登場にはそれなりの強い動機（why）があってしかるべきである。今回のわれわれのケースでは、(12)の新旧どちらの表現であっても、「否定」「尊敬」「命令」「適用形」という四つの意味機能は十全に表現されている。にもかかわらず、「なぜ」(12)a から(12)b への変化は生じたのであろうか（リサーチクエスチョン（= (4)b））。この問いは、さらに、互いに関連する次の二つの疑問文に分解することができ、本稿では、これらの問いに答えるための、(14)に示す仮説を提案したい。

(13) 問われるべき問い

a. 18 世紀から 19 世紀末頃まで、何が、新規表現の発達を阻害していたのか？

b. 20 世紀初頭になって、何が、旧表現の使用を阻むようになったのか？

(14) 仮説 : 終助詞「な」の意味機能に異分析が生じ、新しく獲得した「な」の意味制約が、「尊敬語」や「適用形」の意味と衝突するようになってしまった。

a. 変化後 :「な」は、「話し手の地位＞聞き手の地位」であることが必須となった。

b. 変化前 :「な」に、上記の制約は存在しない。

(14)a で言う、「な」が獲得した新しい意味機能とは、談話参与者の（社会階層的）地位に関するものである。例えば、「な」は(15)のような強制的な命令や、(16)のような助言などでも用いられるが、これらの文は目上の人に対して使用することはできず、現代日本語では「話し手の地位＞聞き手の地位」という関係を制約が存在することが分かる。

(15) a. 切り株で足を怪我させる<u>な</u>！ 強制

b. 廊下を走るな！

(16) a. 季節の変わり目だから、風邪なんかひくなよ！　　助言

b. パスポート持ってくるの忘れんなー！

c. まあまあ、俺のことは気にするな。大丈夫だから。

d. そんなに気をもむな。体に悪いぞ。

しかし、下記に述べる三つの理由から、社会的階層の上下関係に関する制約は、昔の日本語の「な」には存在しなかったと考えられる。第一に、(17)に示された例文を見られたい。この歌は「我が背」という表現が使われていることから女性から男性への言葉であると考えられるが、当時の社会状況を考えると、これは「聞き手の地位＞話し手の地位」という状況で発せられたのではないかと想定するのが妥当であろう。これは、(15)a が、現代日本語で「聞き手の地位＞話し手の地位」では用いられないのとは対照的である。

(17) 刈りばねに 足踏ましむな（安思布麻之牟奈） 沓履け我が背

（意訳：「切り株で馬の足を怪我させないで。靴をはかせて、あなた」『万葉集』）

第二に、冒頭で(1)に見たように「な」は、尊敬語との共起が可能であったことを振り返られたい。命令文における主語も、尊敬語が表す敬意の対象も必然的に聞き手となることから、「な」は「聞き手の地位＞話し手の地位」の状況でも用いられた、ということになる。

第三に、話し手と聞き手の身分上の上下関係が中古の「な」の使用に関係しないことを定量的に示した研究が存在する。例えば、細川（1977:38）は、中古散文資料を調査し、終助詞「な」を用いた否定命令文の話し手と聞き手の身分関係を整理している。「話し手の地位＞聞き手の地位」が 82 例、「話し手の地位＝聞き手の地位」が 4 例、「話し手の地位＜聞き手の地位」が 10 例という結果が得られ、この使用割合が、「な…そ」を用いた他の否定命令文などとほとんど変わらないことから、「…な」が身分の高いものから低いものにのみ使われたというような解釈は成立しない、という結論が導かれている。

以上の点から、(14)に示したように、否定命令を表す「な」は、当初、聞き手の地位の高い低いに関わらず用いることが可能であったが、ある時代から「話し手の地位＞聞き手の地位」という制約を持つようになり、現代日本語に見られる意味機能を持つに至っている、と考えてよかろう。

この仮説が正しければ、(13)に掲げた問いに対しては次のように答えられることとなる。第一に、(13)a については、言語習得における保守性から説明が与えられる。すなわち、

新しく言語を学ぶ世代は、それまでの世代の話者が生産した文の集合（コーパス）から言語を獲得する。親世代の文法では、支障なく「な」を適用形と用いることができたため、新生代の話者はその慣習をできる限り忠実に継承していたため、20 世紀まで「てくださるな」という形式を用いることは可能であった、というわけである。

第二に、(13)b については、20 世紀初頭の少し以前に、「な」の意味機能に強い制約が生まれたため、この意味が、(i)（命令文の中における）適用形が表す「話者の地位＜聞き手の地位」という意味、または、(ii)（命令文の中における）尊敬語が表す「話者の地位＜聞き手の地位」という意味と衝突してしまい、この意味的矛盾から旧形式を使用することが不可能となってしまった、という説明が与えられる。したがって、「…てくださるな」から「…ないでください」への変化とは、「な」の意味機能の変化が、引き起こした「ドミノ効果（Domino effect）」であると理解することができる。

6. まとめと今後の課題

通言語的比較が進んだ今日、現代日本語の尊敬語の特異的な性質の一つとして注目を浴びているものが、命令文、適用形との相互作用である。先行研究では、尊敬語を命令文にする際に適用形が必要になることについて理論化が進んでいるが（Yamada 2019, 2022）、否定命令文が「…てくださるな」から「…ないでください」へと変化したことも、尊敬語、適用形、命令文の間の関係を深く理解するための重要な鍵になると考えられる。

そこで本稿では、コーパス調査からこの変化が 20 世紀前半に起きたこと、そして、この変化は、時代的に先行していた「な」の異分析によってもたらされたドミノ効果として解釈される、ということを提案した。現代日本語の「な」には、「否定」「命令」という意味のほかに「話し手と聞き手の地位の違い」に関する情報が追加で表現されており、それが、「適用形」あるいは「尊敬語」が表出する「話し手と聞き手の地位の違い」の情報と衝突するため、「…てくださるな」という形式が使われなくなった、というものである。

本分析の結論をより確かなものとするために、将来の研究で、検証されるべき点もある。第一に、目下の者から目上の者へ発せられた文における「な」が、19 世紀頃まで存続し、それが、20 世紀の少し手前で消滅した、という予測を検証する必要がある。第二に、それまで談話参与者間の社会的地位に関して何の制約を持たなかった「な」が、どのように制約を持つようになったのかについて、詳しい研究が望まれる。最後に、現行の説明では、「な」の意味が衝突する対象が、「適用形」の意味なのか、「尊敬語」の意味なのか、それとも両方ともなのかといった点が判然としない。「…てくれるな」「…ておくれるな」「…ないでくれ」という非尊敬形での変化を考察し、詳細な検討を施す必要がある。

使用されたコーパス

国立国語研究所（2011）『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（Version 2021.3，中納言 2.7.2）https://ccd.ninjal.ac.jp/bccwj/index.html（2024 年 4 月 21 日確認）

国立国語研究所（2024）『日本語歴史コーパス』（Version 2024.3，中納言 2.7.2）https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/（2024 年 4 月 21 日確認）

小木曽智信・近藤明日子・髙橋雄太・田中牧郎・間淵洋子編（2023）『昭和・平成書き言葉コーパス』（Version 2023.5，中納言 2.7.2）https://clrd.ninjal.ac.jp/SHC/（2024 年 4 月 21 日確認）

参考文献

Alok, Deepak and Mark Baker (2022) Person and Honorification: Features and Interactions in Magahi, *Glossa: a journal of general linguistics* 7(1), 1–35.

Haddican, Bill (2018) The Syntax of Basque Allocutive Clitics. *Glossa: a journal of general linguistics* 3(1):101, 1–31.

細川英雄（1972）「禁止表現形式の変遷:『な―』・『な―そ』・『―な』について」『国文学研究』48, 87–98.

細川英雄（1976）「禁止表現形式の歴史的関係について:その表現上の差異を手がかりに」『国文学研究』60, 54–66.

細川英雄（1977）「中古散文資料における『ナ―ソ』・『―ナ』の差異について」『国文学研究』62, 35–48.

細川英雄（1982）「『天草版平家物語』の『な―そ』をめぐって」『国語学 研究と資料』6, 201–224.

池田併治（1935）「禁止表現法史」『国語国文』5(10), 1–53.

今西浩子（1970）「『―ナユメ』表現についての一考察」『昭和学院大学紀要』7, 35–47.

Kaur, Gurmeet (2017) Variation in Subject-Triggered Clitic Restrictions: A Case of Punjabi, *Proceedings of Glow in Asia XI*, 111–126.

金田一春彦（1976 [1947]）「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房.

蔵中進（1958）「禁止表現における否定辞『な』について」『国語学』32, 106–113.

McFadden, Thomas (2020) The morphosyntax of allocutive agreement in Tamil. In *Agree to Agree: Agreement in the Minimalist Programme*, ed. P. W. Smith, J. Mursell, & K. Hartmann, 391–424, Berlin: Language Science Press.

Miyagawa, Shigeru (2012) Agreements that occur mainly in Main Clauses. In *Main*

Clause Phenomena: New Horizons, ed. L. Aelbrecht, L. Haegeman, & R. Nye, 79–112. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Miyagawa, Shigeru (2017) *Agreement beyond Phi.* Cambridge, MA: MIT Press.

宮島達夫(1972)『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版.

森英樹(2013)「日本語否定命令文の歴史的変遷」『福井県立大学論集』40, 1–13.

村上三寿(1993)「命令文―しろ、しなさい―」『ことばの科学』6, 67–115.

仁田義雄(1991)『日本語の人称とモダリティ』ひつじ書房.

尾崎奈津(2007)「日本語の否定命令文をめぐって:『スルナ』を述語とする文の特性と機能」『日本語の研究』3(1), 65–79.

Portner, Paul, Miok Pak, and Raffaella Zanuttini (2019) The Speaker-Addressee Relation at the Syntax-Semantics Interface, *Language* 95(1), 1–36.

滝浦真人(2017)『日本語敬語および関連現象の社会語用論的研究』博士論文. 北海道大学.

田中司郎(2002)『日本語古典文学に見える禁止表現「な…そ」の形態的研究』宮崎南印刷.

Wang, Ruoan (2023) Honorifics without [HON]. *Natural Language & Linguistic Theory* 41, 1287–1347.

Yamada, Akitaka (2019) An OT-driven dynamic pragmatics: high-applicatives, subject-honorific markers and imperatives in Japanese. In *New Frontiers in artificial intelligence: JSAI-isAI International Workshps, JURISIN, AL-Biz, LENLS, Kansei-AI Yokohama, Japan, November 10-12, 2019 revised selected papers*, 354–369.

山田彬尭(2021)「尊敬語の類型論」『日本言語学会第 162 回大会予稿集』, 82–88.

Yamada, Akitaka (2022). Subject-Honorific Markings in Imperatives: An OT-driven Dynamic Pragmatics.『日本言語学会第 164 回大会予稿集』, 163–169.

山田彬尭(2023)「丁寧語の類型論」『日本言語学会第167回大会予稿集』, 137–143.

Yamada, Akitaka (2023) Looking for Default Vocabulary Insertion Rules: Diachronic Morphosyntax of the Japanese Addressee-Honorification System. *Glossa: a journal of general linguistics* 8(1), 1–47.

A note on inferential evidentials in Qaraqalpaq[1]

Muyi Yang

1. Introduction

Evidentiality is a cross-linguistically well-attested phenomenon that indicates the presence of evidence supporting the uttered proposition. The way that evidentiality is encoded in grammar varies across language. For example, in English, evidentiality can be expressed by adverbs such as *apparently*, as in (1), and parenthetical constructions, as in (2).

(1) Apparently, John won.

p: John won.

Evid(*p*): The speaker has indirect evidence that *p*.

(2) John won, they say.

p: John won.

Evid(*p*): The speaker has indirect evidence that *p*.

Henceforth, I will use the term 'prejacent' (or simply *p*) to refer to the proposition within the scope of the evidential marker; e.g. in (1), *p* is the proposition 'John won'. I will use the term 'evidential proposition' (or *Evid*(*p*)) to refer to the proposition that the speaker holds evidence that supports *p*.

Since Willett (1988), it has been well-established that evidentials can be divided into the direct and the indirect type depending on whether the evidence is obtained through a primary or a secondary source. Within indirect evidentials are reportative evidentials, i.e. where *Evid(p)* encodes verbal report, and inferential evidential, i.e. where *Evid(p)* provides evidence for the prejacent via an agent's reasoning.

(3) a. Direct evidence: visual, auditory, other sensory

b. Indirect evidence (e.g. *apparently*, *must*)

- Reportative evidence: Second-hand, third-hand, folklore (e.g. parenthetical *they say*)
- Inferential evidence: Results, reasoning

The goal of this note is to present a paradigm of inferential evidentials in Qaraqalpaq, a Turkic language spoken in Karakalpakstan, Uzbekistan. In formal semantics, one of the main issues regarding evidentials is whether they are modals (e.g. Izvorski 1997, Matthewson et al. 2007) or

[1] This note is part of my term paper written for Field Methods in Spring 2019 at University of Connecticut. I am grateful to Elnara Klicheva for sharing her wonderful language with us, as well as the instructor of the class Asia Pietraszko for introducing me to world of linguistic fieldwork. All errors are mine.

illocutionary operators (e.g. Faller 2002). This note is an attempt to identify the status of inferential evidentials in Qaraqalpaq by applying the standard tests established in the literature.

2. Inferential evidentials in Qaraqalpaq

Qaraqalpaq has three types of indirect evidentials: the non-verbal predicate *ʃɥʁar* 'maybe', the adverb *mɤmkən* 'maybe', and the predicate *ʊqs* 'look like'.

- ***ʃɥʁar* 'maybe'**

The use of the non-verbal predicate *ʃɥʁar* 'maybe' as a marker of inferential evidentiality is exemplified by (4) below. Note that the embedded verb takes its participle form inflected for -*GAn*.

(4) *wol* *alma-nɯ* *ʒe-gen* ***ʃɥʁar***.
3SG apple-ACC eat-PTCP maybe
p: He ate the apple.
Evid(*p*): The speaker infers that *p* (e.g. apples skins on his desk).

Although *ʃɥʁar* consists of the verb *ʃɥʁ* 'exit' and the possibility future marker -*ar*, its meaning under the evidential use is not compositional. *ʃɥʁar* does, however, have a use under its literal meaning 'might come/go (in the future)', but this requires the embedded verbs to be inflected differently, viz. in the form of the non-finite -*Ep*. Compare (5) with (4).

(5) *wol* *alma* *ʒe-p* ***ʃɥʁ-ar***.
3SG apple eat-NONF go-MOD
'He might come to eat an apple.'

In addition, *ʃɥʁar* can also describe inferences about future states of affairs and events in-progress.

(6) *ʒaɯɥn* *ʒau-a-ʒaq* ***ʃɥʁar***.
rain fall-NPST-IMM.FUT maybe
p: It's going to rain soon.
Evid(*p*): The speaker has inferential evidence that *p* (e.g. the thunder).

(7) *apa-m* *keʃ-ke* *auqat* *pəsər-əp* *atɯr-ʁan* ***ʃɥʁar***.
grandma-1SG.POSS evening-DAT food cook-NONF PROG-PTCP maybe
p: Grandma is cooking dinner.
Evid(*p*): The speaker infers *p* (e.g. good smell coming from the kitchen).

- ***mɤmkən* 'maybe'**

The second inferential evidential marker is the adverb *mɤmkən* 'maybe', as in (9).

(8) *wol* *alma-nɯ* *ʒe-u͡ə* ***mɤmkən***.
3SG apple-ACC eat-INF maybe
p: He will eat the apple.
Evid(*p*): The speaker infers *p* based on evidence (e.g. he loves apples).

mɤmkən is the only evidential marker that associates with future events by default. However, when it

takes the light verb *bol-* 'be', *mɤmkən* can also express inference about past events. In that case, the infinitival appears as the allomorph *-u͡uuɥ*.

(9) *wol* *alma-nuɥ* *ʒe-gen* *bol-u͡uuɥ* ***mɤmkən***.

3SG apple-ACC eat-PTCP be-INF maybe

p: He has eaten the apple.

Evid(p) : The speaker infers *p* (e.g. apple skins in his trash bin).

- ***ʊqs* 'look like'**

The last inferential evidential marker is *ʊqs-ap tʊr* 'it looks like', as exemplified below.

(10) *ajaz.baba* *kel-gen-ge* ***ʊqs-ap*** *tʊr.*

Santa.Claus come-PTCP-DAT look.like-NONF AUX

p: Santa Claus came.

Evid(*p*) : The speaker infers *p* (e.g. there are many presents under the Christmas tree).

3. Epistemic modals or illocutionary force: The standard tests

I adopt the standard tests for evidentials developed in Matthewson et al. (2007) in analyzing the paradigm of inferential evidentials in Qaraqalpaq. In the literature, there are two main approaches to evidentiality. Some evidential expressions have been analyzed as epistemic modals, e.g. Izvorski (1997), Matthewson et al. (2007). Under this approach, both *p* and *Evid*(*p*) contribute to the meaning of the utterance, although the way their contribution is made depends on the theory. For example, in Izvorski (1997), *p* (or more precisely, *MUST p*) constitutes the assertive content of the utterance, and *Evid*(*p*) constitutes the presupposition. The other approach analyzes evidential markers as illocutionary operators (Faller 2002). Under this analysis, evidential expressions do not contribute to the truth-condition of the utterance. Rather, they weaken the illocutionary force of the utterance from pure assertion to a mere 'presentation' type of speech act. At the same time, they modify the sincerity condition of the utterance (e.g. 'there is some other speaker who has uttered *p*' for reportative evidentials). Note that even within one language, it is possible to find both modal-like evidentials and speech-act-like evidentials. See Table 1 for a summary of the tests.

Table 1: Matthewson et al. (2007)'s tests and predictions

	Modal analysis	Illocut. analysis
a. Felicitous if *p* is known to be false?	no	yes
b. Felicitous if *p* is known to be true?	no	yes
c. *Evid*(*p*) cancelable?	no	no
d. *Evid*(*p*) projects over negation?	yes	yes
e. *Evid*(*p*) can be picked up? (Originally: Challengeable?)	yes	no
f. Embeddable?	yes	no

Below are examples from English that have been adduced to motivate the modal analysis. I omit examples that illustrate the illocutionary operator analysis, because there are no data from English evidentials that would argue for this approach, to the best of my knowledge. First, an epistemic-like evidential asserts that *p* is (necessarily or possibly) true. Thus, a speaker who knows *p* to be false cannot use evidentials felicitously, even if she holds evidence supporting *p*.

(11) **Test a:** #It might be raining, but it is not. (Faller 2002, p. 191)

If the truth of *p* is known, utterance of an evidential would violate the Gricean Maxim of quantity, even if the speaker has evidence supporting *p*.

(12) **Test b:** #It's raining, and it might be raining. (Veltman 1996)

Evid(*p*) is presuppositional in (at lease in some version of) the modal analysis of evidentials, and thus not cancelable.

(13) **Test c:** #It might be raining. Actually, I saw it.

Again, since *Evid*(*p*) is presuppositional, it should scope over negation.

(14) **Test d:** It might not be raining.

p: It's not raining; *Evid*(*p*): The speaker has evidence supporting *p*.

Not: *p*: It's raining; *Evid*(*p*): The speaker does not have evidence supporting *p.*

Test e is the most controversial one and has raised many discussions in the literature. One of the reasons is that testing challengeability introduces the complications of using response particles like *yes* and *no* and anaphors like *that* as in *That's right/wrong*, which may behave differently across languages. Because our goal now is to tease apart modal-like evidentials and speech act-like evidentials, I will test whether *p* and *Evid*(*p*) can each be accepted or rejected. Since the illocutionary operator analysis suggests that *Evid*(*p*) only contributes to the sincerity condition of the utterance, it predicts that *Evid*(*p*) cannot be picked up. Under the modal analysis, picking up *Evid*(*p*) should be possible.

(15) **Test e:**

a. A: Alfred might be secretly seeing Barbara. (Matthewson et al. 2007 (23))

b. B: Yeah, he is. *(= He is secretly seeing Barbara.)*

B': I agree. *(= I agree that he might be secretly seeing Barbara.)*

Finally, since *Evid*(*p*) makes semantic contribution to the truth of the proposition, the evidential can be embedded.

(16) **Test f:** If the ball was reportedly over the line, the matter should be investigated further.

Paraphrase: '*If it is reported that the ball was over the line, the matter should be investigated further.*' (Faller 2002)

4. Testing Qaraqalpaq inferentials

- **Test a: When *p* is known to be false**

When *p* is known to be false, *ʃɰʁar*, *mʏmkən* cannot be used, while *ʊqs* is felicitous.

(17) Context: The flowers in the garden of your house are all wet, and you know that it's because your friends have watered them in the morning, and it didn't rain.

a. #*ʒaɯɰn* *ʒau-ʁan* ***ʃɰʁar***.
rain fall-PTCP maybe
'It may have rained (I infer).'

b. #*ʒaɯɰn* *ʒau-ʁan* *bol-ɰɯɰ* ***mʏmkən***.
rain fall-PTCP be-INF maybe
'It might have rained (I infer).'

c. *ʒaɯɰn* *ʒau-ʁan-ʁa* ***ʊqs****-ap* *tʊr.*
rain fall-PTCP-DAT look.like-NONF PROG
'It looks as if it had rained (I infer).'

- **Test b: When *p* is known to be true**

When *p* is known to be true, none of the markers can be used felicitously.

(18) Context: It started raining while you were taking a walk. You rushed home, grabbed an umbrella and went out again. When you opened the door, it already stopped raining, but the flowers in your garden were all wet.

a. #*ʒaɯɰn* *ʒau-ʁan* ***ʃɰʁar***.
rain fall-PTCP maybe
'It may have rained.'

b. #*ʒaɯɰn* *ʒau-ʁan* *bol-ɰɯɰ* ***mʏmkən***.
rain fall-PTCP be-INF maybe
'It might have rained.'

c. #*ʒaɯɰn* *ʒau-ʁan-ʁa* ***ʊqs****-ap* *tʊr.*
rain fall-PTCP-DAT look.like-NONF PROG
'It might have rained.'

- **Test c: Cancelability**

Evid(*p*) is not cancelable in all cases.

(19) #*ʒaɯɰn* *ʒau-ʁan* ***ʃɰʁar***, *rastan* *men* *ʒaɯɰn* *ʒau-ʁan-ɰm* *kør-də-m.*
rain fall-PTCP maybe actually 1SG rain fall-PTCP-1.POSS see-PST-1SG
'It might have rained, actually I saw it.'

(20) #*ʒaɯɰn* *ʒau-ʁan* *bol-ɰɯɰ* ***mʏmkən***, *rastan* *men* *ʒaɯɰn* *ʒau-ʁan-ɰm*
rain fall-PTCP be-INF maybe actually 1SG rain fall-PTCP-1.POSS
kør-də-m.
see-PST-1SG
'It might have rained, actually I saw it.'

(21) #*ʒauɯn* *ʒau-ʁan-ʁa* ***ʊqs**-ap* *tʊr,* *rastan* *men* *ʒauɯn*
rain fall-PTCP-DAT look.like-NONF PROG actually 1SG rain
ʒau-ʁan-ɯm *kør-də-m*
fall-PTCP-1.POSS see-PST-1SG
'It looks like it rained, actually I saw it.'

- **Test d: Projection over negation**

For all three markers, *Evid*(*p*) projects over negation.

(22) Context: We're living in a rainy season, and it's been raining every day. Today you have been studying in a room without windows and you have no idea how the weather was like outside. But you saw that everyone walking into the hallway are wearing sunglasses.

a. *ʒauɯn* *ʒau-ma-ʁa* ***ʃɯʁar**,* *mɯna* *adam-lar* *køz-ajnek-ler-ən* *kij-əp*
rain fall-NEG-PTCP maybe this man-PL eye-window-PL-ACC wear-NONF
***tʊr**.*
PROG

b. *ʒauɯn* *ʒau*-ma-*ʁan* *bol-ɯuɯ* ***mʏmkən**,* *mɯna* *adam-lar* *køz-ajnek-ler-ən*
rain fall-NEG-PTCP be-INF maybe this man-PL eye-window-PL-ACC
kij-əp *tʊr.*
wear-NONF PROG

c. *ʒauɯn* *ʒau*-ma-*ʁan-ʁa* ***ʊqs**-ap* *tʊr,* *mɯna* *adam-lar*
rain fall-NEG-PTCP-DAT look.like-NONF PROG this man-PL
køz-ajnek-ler-ən *kij-əp* *tʊr.*
eye-window-PL-ACC wear-NONF PROG

'It might not have rained. These people are wearing sunglasses.'

NOT: 'I don't have evidence that it rained.'

Note that this holds even when the negation is a sentential negation scoping over *ʊqs 'look like'* on the surface, as in the following example (it is impossible to form such construction with *ʃɯʁar* and *mʏmkən*, though).

(23) *ʒauɯn* *ʒau*-ma-*ʁan-ʁa* ***ʊqs**-ap* *tʊr-ʁan* *ʒoq,* *mɯna*
rain fall-NEG-PTCP-DAT look.like-NONF PROG-PTCP NEG.COP this
adam-lar *køz-ajnek-ler-ən* *kij-əp* *tʊr.*
man-PL eye-window-PL-ACC wear-NONF PROG

'It's not the case that it looks like it rained. These people are wearing sunglasses.'

NOT: 'I don't have evidence that it rained.'

- **Test e: Picking up by accepting or rejecting responses**

For all three markers, both *p* and *Evid*(*p*) can be picked up when the utterance is accepted, as in (25) and (26).

(24) Context: Elnara and Horzija are playing a game. Elnara hides marbles of different colors and shapes behind a curtain, and Horzija cannot see the marbles. Elnara gives Horzija some hints, and Horzija guesses what colors and shapes the marbles are. After a few rounds, Horzija starts guessing. Horzija to Elnara…

a. *perde-neŋ* *artɯ-nda-ʁɯ* *qɯzɯl* *tas* ***ʃɯʁar.***
curtain-GEN behind-LOC-DAT red rock maybe

b. *perde-neŋ* *artɯ-nda-ʁɯ* *qɯzɯl* *tas* *bol-ɯɯɯ* ***ʏʏmkən.***
curtain-GEN behind-LOC-DAT red rock be-INF maybe

c. *perde-neŋ* *artɯ-nda-ʁɯ* *qɯzɯl* *tas-ʁa* ***ʊqs-ap*** *tʊr.*
curtain-GEN behind-LOC-DAT red rock-DAT look.like-INF PROG

'There might be a red marble behind the curtain.'

(25) As a response to (24a), (24b) and (24c):

dʊrɯs. *wol* *qɯzɯl* *tas.*
right 3SG red rock

'You're right, it's a red marble.'

(26) a. As a response to (24a) and (24b):

dʊrɯs. *{ʃɯʁar* / *bol-ɯɯɯ* *ʏʏmkən.}*
right maybe be-INF maybe

'You're right, there might be.'

b. As a response to (24c):

dʊrɯs-qa *ʊqs-ap* *tʊr.*
right-DAT look.like-NONF PROG

'It seems correct.'

When the utterance is challenged, *p* can be easily picked up, as in (27). Challenging *Evid*(*p*), however, is judged to be infelicitous, as in (28). For the sake of identifying the modal or the illocutionary operator status of Qaraqalpaq inferential evidentials, I think it is sufficient to know that *Evid*(*p*) can be picked up when the utterance is accepted. In the future, I will try to explore whether the infelicity of (28) is caused by any confounds, such as whether the response particle *qate* 'wrong' is problematic in this context.

(27) As a response to (24a), (24b) and (24c):

qate, *wol* *qɯzɯl* *tas* *je-me-s.*
wrong 3SG red marble AUX-NEG-?

'You're wrong, it's not a red marble.'

(28) # As a response to (24a), (24b) and (24c):

qate, *wol* *qɯzɯl* *tas* *ʒoq* *{ʃɯʁar* / *ʏʏmkən* / *-qa ʊqs-ap* *tʊr.}*
wrong 3SG red marble NEG.COP maybe maybe -DAT look.like-NONF PROG

‘You’re wrong, it might not be a red marble.’

- **Test f: Embeddability**

Finally, *Evid(p)* can be embedded under *say* in all cases.

(29) a. *Muyi ajt-щp atщr ʒauщn ʒau-ʁan* ***ʃщʁar*** *dep.*
Muyi say-NONF PROG rain fall-PTCP maybe C

b. *Muyi ajt-щp atщr ʒauщn ʒau-ʁan bol-щuщ* ***mʏmkən*** *dep.*
Muyi say-NONF PROG rain fall-PTCP be-IN maybe C

c. *Muyi ajt-щp atщr ʒauщn ʒau-ʁan-ʁa* ***ʊqs****-ap tʊr dep.*
Muyi say-NONF PROG rain fall-PTCP-DAT look.like-NONF PROG C

‘Muyi is saying that it might have rained (she has indirect evidence).’

The result is summarized in Table 2 below.

Table 2: Results of Matthewson et al. (2007)’s tests on Qaraqalpaq inferentials

	Modal analysis	Illoc. analysis	*ʃщʁar*	*mʏmkən*	*ʊqs*
Felicitous if *p* is known to be false?	no	yes	no	no	yes
Felicitous if *p* is known to be true?	no	yes	no	no	no
Evid(*p*) cancelable?	no	no	no	no	no
Evid(*p*) projects over negation?	yes	yes	yes	yes	yes
Evid(*p*) can be picked up?	yes	no	yes	yes	yes
Embeddable?	yes	no	yes	yes	yes

5. Discussion

The results for *ʃщʁar* and *mʏmkən* are completely as predicted by the epistemic modal analysis. The behavior of *ʊqs*, however, does not fit the predictions of the modal analysis regarding Test a, i.e. when *p* is known to be false. One phenomenon that is possibly related to this observation is that evidentials can sometimes be used counterfactually (Mizuno 2020). For instance, Japanese has a modal-type evidential marker *youda* that allows the speaker to distance herself from believing *p*, as shown in (30). This holds when the sentence is modified by the adverb *marude* ‘as if’, which can be paraphrased as ‘presumably I would infer that it rained’, or ‘had I not known that it hadn’t rained, I would have inferred that it rained based on what I observe’. On the other hand, if the sentence is modified by adverbs like *douyara* ‘apparently’, which forces the speaker to take into account the facts she knows, the continuation of *not p* becomes infelicitous. Note that if the sentence occurs without any adverb, the continuation is fine, suggesting that *youda* is by itself ambiguous between a standard inferential use and a counterfactual inferential.

(30) *{#**dooyara** / **marude** / Ø} ame-ga fut-ta* ***youda*** *kedo, jitsu-wa fut-teinai.*
apparently as.if rain-NOM fall-PST YOUDA but actually-TOP fall-NEG

'It rained (I infer), but it actually didn't.'

Returning to Qaraqalpaq, my hypothesis is that *ʊqs* shares this property with Japanese *youda*. Compare *ʊqs* and *ʃɥʁar* in the following context: unlike *ʃɥʁar, ʊqs* is allowed as long as it is *presumably* the case that the relevant inference can be made (i.e, the counterfactual inferential use).

(31) Context: Waking up in the morning and found lots of presents under the Christmas tree…

a. *ajaz.baba* *kel-gen-ge* ***ʊqs-ap*** *tʊr.*
Santa.Claus come-PTCP-DAT look.like-NONF PROG
'It seems that S.C. came.' (OK even if the speaker knows that S.C. doesn't exist.)

b. ajaz.baba kel-gen ***ʃɥʁar***.
Santa.Claus come-PTCP maybe
'Santa Claus might have come.' (OK only if the speaker believes that S.C. exists.)

6. Summary

This note provided the paradigm of inferential evidentials in Qaraqalpaq. Specifically, I applied the standard tests to identify the status of the evidential markers as modals or illocutionary operators. The tentative result is that all three markers behave in line with epistemic modals, although more needs to be said regarding whether the markers can express counterfactual evidentiality.

References

Faller, Martina. (2002). *Semantics and Pragmatics of Evidentials in Cuzco Quechua*. PhD thesis, Stanford University.

Izvorski, Roumyana. (1997). The present perfect as an epistemic modal. In *Semantics and Linguistic Theory*, volume 7, pages 222–239.

Matthewson, Lisa, Davis, Henry, and Rullmann, Hotze. (2007). Evidentials as epistemic modals: Evidence from St'át'imcets. *Linguistic Variation Yearbook*, 7(1):201–254.

Mizuno, Teruyuki. (2020). Inferential evidentials in probabilistic causal model: A case study of Japanese *youda.* Manuscript, University of Connecticut.

Veltman, Frank. (1996). Defaults in update semantics. *Journal of Philosophical Logic*, 25(3):221–261.

Willett, T. (1988). A cross-linguistic survey of the grammaticization of evidentiality. *Studies in Language. International Journal Sponsored by the Foundation "Foundations of Language"*, 12(1):51–97.

身体部分名詞を結合した日本語の[N+V]複合語の特徴*

由本陽子

1. はじめに

本稿は日本語の名詞が動詞の連用形と結合した複合語（以下[N+V]型複合語）のなかで、N が身体部分を表す名詞で、かつ、複合語全体が動名詞になり得るもの、すなわち、「する」と直接結合し複雑述語として機能し得る(1)のような例を取り上げ、由本 (2010)で示した考察の補充をするものである。

(1) a. 私はしばらく**骨休め**させてもらいます。
b. 彼は細部に**気配り**して準備した。
c. 油っぽいものを食べ過ぎて**胸焼け**した。

このタイプの[N+V]型複合語で動名詞用法があるものは、辞書にも多く見つかるが、辞書では動名詞用法が記載されていないものでも、インターネット上で検索すると、直接「する」と結合して用いられている例もあって、このタイプの複合名詞形成は生産性があると考えられる。しかしながら、以下に見るように、身体部分名詞との複合には身体部分名詞以外の名詞との複合とは異なる特徴があると考えられる。本稿の目的は、由本(2010)で提示した観察をもとに、そのような特徴を明確にし、それぞれがどのような目的で形成されるかという観点から再考することである。本稿は、由本(2010)に倣い、クオリア構造と LCS による語彙意味記述を用いた分析を基盤とするが、技術的にふみこんだ形式化は行わない。次節では、[N+V]型複合語とその動名詞用法についての先行研究を概観する。3 節で、N が身体部分名詞であるものの性質を明らかにし、4 節でそのうち V が他動詞であるにもかかわらず内項をとらない動名詞となっているタイプについて考察する。5 節はまとめである。

2. 動名詞として機能する日本語の[N+V]型複合語

身体部分名詞が関わる複合名詞の特性を示す前に、動名詞として用いられ得る [N+V]型複合語の性質について、先行研究で明らかにされていることを概観しておきたい。まず、Sugioka (2002)および伊藤・杉岡(2002)では、(2)に挙げた例は[+N]をもつ名詞であるのに対し (3a,b)は[+V]、(4)は[-V]をもつ述語名詞（「A は B だ」における B として用いられる名詞）と考えられている。

(2) a. 行為：金魚すくい、石投げ、米つくり、ボタンつけ、山登り、墓参り、里帰り

* 本稿は、由本(2010)の一部をもとに修正・拡大したものである。

b. 現象：地滑り、崖くずれ、雪解け、耳鳴り、声がれ、胸焼け、手荒れ
c. 動作主：相撲とり、風船売り、羊飼い、人形遣い、酒飲み、客引き
d. 道具：ねじ回し、霧吹き、栓抜き、帯留め、インク消し、郵便受け、水入れ
e. 特徴：金もち、うそつき、風呂好き、親思い、罪作り、面食い、父親似
f. 場所：車寄せ、もの干し、ゴミ溜め、船渡し、水たまり、足がかり
g. 時間：夕暮れ、夜明け、夜更け、週明け、年明け　（伊藤･杉岡 2002:110-111）

(3) a. 水洗い、雑巾ぶき、平手打ち、塩もみ、一人歩き、ばか騒ぎ
b. 日焼け、雪焼け、船酔い、仕事疲れ、ビール太り、着ぶくれ、寝冷え (ibid. 117-118)

(4) 赤むけ、黒こげ、びしょ濡れ、こま切れ、白塗り、四つ割 (ibid. 115)

いずれも出来事を表すにもかかわらず、(2a,b)と(3)を区別する根拠とされるのは、「する」と直接結合して述語になるかどうかということである。(5)に示すように、(2a)のタイプは行為を表すが直接「する」と結合できず、「を」を介入させてはじめて動詞として機能する。(2b)のタイプについては、(6)に示すようにNが身体部分名詞であるもので、本稿4節で取り上げる例((6b))以外、「する」との結合は不自然に聞こえる。「耳鳴り」のように「が」を伴えば容認できる場合はある。これに対して、(2a,b)のタイプは、(7)に示すように「する」と直接結合して、それぞれ他動詞、自動詞として用いることができる。

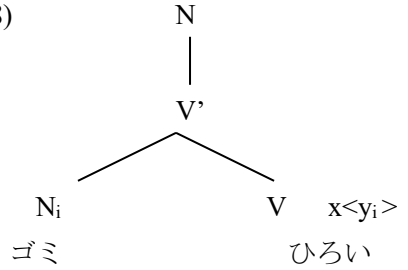
(5) a. *石投げする、*山登りする、??墓参りする
b. 石投げをする、山登りをする、墓参りをする

(6) a. ??裏山が崖くずれした、⁇富士山が雪どけする、耳鳴り*（が）する
b. 胸焼けする、腕組みした、舌打ちした

(7) a. セーターを水洗いする、廊下を雑巾ぶきする、夜道を一人歩きする
b. 日焼けする、船酔いする、ビール太りする、寝冷えする

Sugioka (2002)は、(5) (6)と(7)の違いが、前者は動詞の内項が結合しているのに対し後者では付加詞が結合しているという違いに対応するとし、さらに、両者は異なる部門による語形成であると主張している。簡単に説明すると、(2)の [+N]をもつものは、(8)のような統語構造的に隣接する要素同士の結合によって形成されると考えられており、それ故に、「第一投射の条件」の制約を受ける、すなわち、内項を必須にとる動詞を主要部とする複合語を形成する場合、その内項との複合が義務的になるという。

(8)



一方、Sugioka (2002) によれば、(4)や(3)(7)のタイプは、語彙概念構造(LCS)の中で形成される複雑述語であると主張されており、それゆえ、第一投射の条件が適用されず、付加詞との結合によって複合語が作られると考えられている。Sugioka (ibid.) に従えば、(7a)は様態や道具を表す付加詞が ACT と結合している(9a)、(7b)は原因が BECOME と結合している(9b)のような LCS によって表される。述語名詞になる(4)については、(9c)のように複合した要素が結果を表すので、結果状態が焦点化されると考えられている。その結果、ACT や BECOME で表される(9a,b)は「する」と直接結合する動名詞になり、BE で表される(9c)は状態を表す述語になるとされている。

(9) a. $_{\text{Event}}$ [x ACT (ON y) Manner / Instrument]　早歩き/立ち読み/水洗い/平手打ち（する）
b. $_{\text{Event}}$ [BECOME y Cause / Manner $_{\text{State}}$[BE y AT-Z]] 日焼け/若死に/立ち枯れ（する）
c. $_{\text{State}}$ [BE y AT-Result]　黒こげ/びしょぬれ（だ）

これに対して、Yumoto (2010)は、(10)のように内項との複合による[N+V]型複合語のなかにも直接「する」と結合するものがあることを指摘し、(5)(6)と(7)のタイプの違いは、形成された複合語が項を受け継ぎ、述語として機能し得るかどうかに起因すると主張した。

(10) a. 2 つの内項をとる他動詞から目的語 1 つだけをとる他動詞を作る
パック詰め、船積み、車庫入れ、棚上げ、陸揚げ、蔵出し、湯通し
b. 2 つの内項をとる他動詞から「に」格補語 1 つだけをとる自動詞を作る
味付け、色づけ、景気づけ、動機付け、格付け、てこ入れ、荷積み、砂糖がけ
c. 自動詞の「に」「から」格補語を結合して自動詞を作る
親離れ、乳離れ、仲間入り、蔵入り、迷宮入り、客受け、湯あたり

Yumoto (2010)では、これらと(7)のタイプとの違いは、付加詞ではなく項が結合しているという点だけではなく、語形成の目的の異なりもあると主張した。すなわち、(10)のタイプにおいては、もとの動詞が表す事象に何も新たな要素が付加されておらず、V が表す事象をより特定化する目的で形成されているものではない。これらは、V の項を語内で満たすことにより、もとの動詞が表す事象に異なる視点を与える目的で形成されているものだ

と考えられるのである。たとえば、(7a)の「水洗いする」は「洗う」といってもどういう洗い方なのかを特定し、(7b)の「雪焼けする」は、どういう原因で「焼けた」かを特定している。しかし、(10)のタイプでは、たとえば、「魚を湯通しする」とは、「魚を湯に通す」ことを表すに違いはないが、単なるパラフレーズではなく、湯に通すことによって魚の臭みなどが除かれたという状態変化を含意するものになっている。「スープに味付けする」という場合も、単にスープに味を付加するのではなく、スープの性質を変化させるという意味合いがある。つまり、いずれも V のもとの意味が位置変化を表すのに対して、項との複合によって状態変化を含意する動名詞に変換されているのである。(10c)の自動詞の場合も同様で、V のもとの意味は、主語の位置変化や移動を表すのだが、複合語は、主語の状態変化に焦点をあてた動名詞になっている。

さらに、Yumoto (2010)では、先行研究では看過されていた(11)のような V の結合価を変えないタイプの複合動名詞があることも指摘した。このタイプでは、N は V が選択する項だと考えられ、V から受け継ぐ項が残っていない場合であっても、動名詞として用いられ得るのである。

(11) a. 他動詞から他動詞を作る
灰汁抜き、しみ抜き、渋抜き、値上げ、値下げ、値引き、値踏み、頭だし、
格上げ、格下げ、株分け、種明かし、枝打ち、裾上げ、色止め、底上げ、品定め、
塩出し、幅詰め、艶出し、首切り、口止め、裾分け、高さ制限、価格統制
b. 自動詞から自動詞を作る
格落ち、色落ち、利落ち、値下がり、値上がり、型崩れ、化粧崩れ、値崩れ、
様変わり、代替わり、先細り、先太り

(12) a. 山菜の灰汁を抜く→　山菜を灰汁抜きする、柿の渋を抜く→　柿を渋抜きする
b. 会社の格が落ちる→　会社が格落ちする、金の値が上がる→　金が値上がりする

このタイプでは (12)に示すパラフレーズから明らかなように、新たな項となるのは、複合する名詞に由来するものであり、複合動名詞の目的語は、V が選択するものではない。Yumoto (2010)では、このタイプの動名詞の形成を、V の LCS にはない新たな項を N から獲得するメカニズムをクオリア構造 (cf. Pustejovsky 1995) によって分析した。大雑把に言えば、クオリア構造において何かの「構成する部分」(constituent part_of)であるという性質[1]が記載されている N が V と複合すると、その N の意味項が新たな項として取り出され、その結果、V の項が受け継がれなくとも、複合語の項構造が的確に形成されると考えるのである。さらに、このタイプにおいても、大半は、先述のような(10)のタイプと同様の事象構造の変換が起こっていると考えられる。「抜く」「上げる」「落ちる」「上がる」は、いずれも位置変化や移動を表す動詞だが、(11)に挙げた「灰汁抜きする」「値上がりする」は、

[1] 構成クオリアにおいて部分名詞であることが記述されている。

むしろ、目的語や主語の性質の変化を表しているのである。[2]

このように、同じ[N+V]型の動名詞でも、その目的あるいは動機付けによって 2 種類が区別される。すなわち、もとの動詞概念に修飾要素を付加することでそのサブカテゴリーとなる述語概念を形成する目的で作られているものと、もとの V の項の 1 つを語内で満たすことにより、もとの動詞と同じ事象を表すものの、もとの動詞とは異なる視点で新たな動詞概念を形成するものである。[3]本稿では、この分析を基盤として、身体部分名詞を含む動詞由来複合語についての考察を進める。

3. N が身体部分名詞である[N+V]型複合語の特性

前節では、一般の[N+V]型複合語で動名詞用法があるものに複数のタイプがあることを論じたが、本節では、N が身体部分名詞であるそれぞれのタイプについて観察し、それらの特性を明らかにする。まず、様態や手段・原因を表す修飾要素として身体部分名詞が複合している例として(13)のようなものがある。「手」が複合するものは、ある程度生産性がある。このタイプについては、前節 (9) で示したように、V の LCS に N が修飾要素として付加されることで、より特定された動詞概念を作っているものと考えられる。

(13)　足探り、手招き、手引き、手作り、手焼き、手編み、口移し、鼻あしらい

次に(11)のように、V の結合価に変化の生じないタイプは、生産性が高いとはいえないが、実在語としては(14)のようなものがある。

(14)　a. 頭出し、足止め、口止め、口封じ、尻ぬぐい、足切り
　　b. 気落ち、気疲れ、気抜け、声枯れ、声変り、心変り、胸焼け、目移り、息切れ

(14a)は V が他動詞、(14b)は自動詞の例である。2 節で述べたように、これらは、身体部分名詞から項を受け継いでいるタイプと見なすことができる。すなわち、(15)に示すように V が選択する目的語あるいは主語にあたるのは身体部分名詞であり、複合動名詞の主語や目的語は、V に選択されているものとはいえない。これらが選択するのは、身体部分名詞のクオリア構造から導き出された項だと考えることができる。[4]

---

[2] 技術的な分析には、本稿では立ち入らない。詳細は Yumoto (2010)を参照されたい。

[3] Yumoto (2010)では、このタイプの複合はその動機付けにおいて英語など他言語における(i)のような構文交替と共通性が見られることを指摘した。ただし、日本語ではあくまでもレキシコンにおける新たな述語形成であるため、より意味的制約が厳しい。

(i)　a. John loaded hay onto the truck. /　John loaded the truck with hay.
　　b. The price of meat fell　/　Meat fell in price.　(cf. Levin 1993)

[4] ほとんどの場合部分名詞であることが記述されている構成役割が利用されているが、「息」の場合は、動物が吸ったり吐いたりすることで生じるものであることが記述されている主体役割を利用して、その発生源が複合動名詞の項となると分析される。

(15) a. 演奏する曲を頭出しした／⁇演奏する曲を出した
受験生を足切りした≠受験生を切った
b. 私は胸焼けした／*私は焼けた、健は声変わりした≠健は変わった

ただし、このタイプについては注意すべき点がある。それは、(16)に示すように、N が身体部分名詞の場合、動名詞として用いることができない場合も多いという事実である。

(16) a. お母さんの肩をたたく→*お母さんを肩たたきする、王様のひげをそる→*王様をひげそりする、子供の手を取る→*子供を手取りする、客の足を洗う→*客を足洗いする、鹿のツノを切る→⁇鹿をツノ切りする、舞子の髪を結う→*舞子を髪結いする
b. 健は鼻がつまった→*健は鼻づまりした、葵の骨が折れた→*葵は骨折れした、子供の歯が抜けた→*子供が歯抜けした

(14)と(16)の違いはどこにあるのだろうか。由本(2020)では、いわゆる不可分所有の関係をもつ名詞の中でも、名詞から項を受け継いで動名詞を作るのは、「形質名詞」と見なされる N との複合に限定されると主張した。以下の例を見られたい。

(17) a. 生地の色を止める→生地を色止めする、大学の格を上げる→大学を格上げする、本の値を上げる→本を値上げする、予算の嵩を上げる→予算を嵩上げする
b. 生地の色があせる→生地が色あせする、洋服の型が崩れる→洋服が型崩れする、金の値が下がる→金が値下がりする、健の心が変る→健が心変わりする

「形質名詞」とは、物体の部分というよりも、物体の属性を決定する際に注目する相(facet)を指す（由本 2020: 61）。たとえば、「洋書が高い」という文は「洋書」の「値」が高いことを表しており、この場合の「値」は、属性そのものではなく、属性を描写する相＝形質なのである。その形質を対象として行われる行為は、すなわち、その物体全体にも影響を及ぼす行為だと見なされるため、(17)のようなパラフレーズが成立すると考えられるのである。しかし、(15)の例に用いられている身体部分名詞は形質だとは言い難い。ただし、これらの例で「頭、足、口、尻、目」は、身体部位を表しているのではなく、比喩的に「始まり、移動すること、喋ること、結末、視線」を表している。また、「気、声、心、息」は身体の部位ではなく、身体に存在するもの、あるいは身体から生じるものを表す名詞である。ゆえに、これらの N の人体との部分‐全体関係は、実際の身体部位を表す名詞よりも緊密だと考えられる。その緊密性とは、すなわち、単独では指示対象が特定できないということである。いっぽう、西川(2013)によれば、普通の身体部分名詞は、不可分所

有関係にあるとは言われるが、「所有者」あるいは「全体」概念が定まらなければその外延(extension)が決定されないというものではない。(14)と(16)の容認性の違いは、このような名詞の意味の違いに起因すると考えられる。

次に 2 節の後半で述べた、V の項を満たす N と複合していると考えられるタイプで N が身体部分名詞のものについて見てみたい。このタイプには、V が(18)のように内項を 2 つとるものと、(19)のように目的語 1 つしか内項をとらないものの 2 種類がある。

(18)　面出し、手出し、目配り、気配り、口添え、肩入れ、手入れ、手当て
(19)　骨休め、骨惜しみ、舌打ち、舌なめずり、足馴らし、足固め、腕組み、腕まくり

(18)の V が 2 つの内項をとるタイプでは、由本(2010)でも指摘したように、 (20)に示すように、複合できる身体部分名詞は「を」格で標示される目的語にあたる項であり、(21)に示すように同じ V でも身体部分名詞を「に」格補部としてとる場合には、複合語を作らないという一般化が見られる。これは、(10a,b)からわかるように、普通の名詞には観察されない制約である。

(20) 他人のけんかに手（＝世話）を出す→他人のけんかに手出しする、細部に目（＝視線）を配る→細部に目配りする、友人に口（＝ことば）を添える→友人に口添えする、植木に手（＝手を使ってすること）を入れる→植木を手入れする
(21) 不満を口に出す→*不満を口出しする、商品を手に入れる→*商品を手入れする、不安を顔に出す→*不安を顔出しする、 安否を気にかける→*安否を気がけする、家柄を鼻にかける→*家柄を鼻がけする、料理を口に入れる→*料理を口入れする、

とりわけ、「口に出す、口を出す」「手に入れる、手を入れる」「顔を出す、顔に出す」のように同じ N と V の組み合わせでもこのような違いが見られる点に注目したい。この理由について、由本(2010: 95)では、V の LCS に名詞概念が代入される際、(21)のタイプでは、身体部分名詞が主語項に束縛される必要があるのに対して、(20)のタイプの身体部分名詞は、比喩的意味拡張の結果、部分名詞としての性質を失っており、そのため束縛される必要がないという違いに起因すると説明した。LCS によって表すなら、以下のようになる。(23)では、上付き文字の α によって束縛関係が示されている。

(22) 口を出す⇒口出し（VN）: [x] CAUSE [[OPINION]$_i$ BECOME [[OPINION]$_i$ BE AT-[y]]]
(23) 口に出す⇒*口出し（VN）: [x]$^{\alpha}$ CAUSE [[y] $_i$ BECOME [[y]$_i$ BE AT-[MOUTH] $^{\alpha}$]]

この説明を支持する根拠として、以下のような違いを指摘することができる。

(24) a. *山田さんは同僚の企画にいつも自分の口を出す。
b. *花子は子供たちの行動に自分の目を配るようにしていた。
c. *先生は就職先の上司に自分の口を添えてくれた。
(25) a. 私は長年探している骨董品を自分の手に入れるまでは古物商を続けたい。
b. 山田さんは自分の手に余る仕事をすぐ同僚にまわす。
c. 王様は自分の口に合わない料理はすべて捨てさせた。

すなわち、(20)の[N+V]型複合語の基盤となっている句では、(24)のように身体部分名詞に「自分の」をつけると不自然だが、複合語を作れない(21)のタイプでは、(25)のように問題なく容認できるという違いがある。これは、身体部分名詞の解釈において両者に違いがある[5]ことを示している。由本(2010)に少し補足をすれば、(20)のタイプにおける身体部分名詞は、(14)についても述べたように、物理的な身体部位を表すものに比べてより緊密な部分‐全体関係をもつものと言えるのだが、それは裏返せば、クオリア構造も導入した意味記述においては、その関係性が語彙的に示されており、項構造における束縛関係を経ずとも解釈できることを意味する。

また、(20)のタイプについては、目的語と複合したことによって、「に」格標示される項のみが受け継がれ、自動詞が形成されることになるのだが、興味深いことに、「手入れ」「手当て」などは、他動詞として用いられることがある。特に名詞化した場合、一般に場所項を表す「に」格名詞は「への」を伴って現れるのだが、これらは、「の」で表すことができる。これは、(26b)(27b)に示すように形質名詞の場合にも観察されることである。

(26) a. 植木｛*に／を｝手入れする、傷口｛*に／を｝手当てする
b. スープ｛に／を｝味付けする、大学｛に／を｝格付けする
(27) a. 植木｛*への／の｝手入れ、傷口｛*への／の｝手当て
b. スープ｛*への／の｝味付け、大学｛?? への／の｝格付け

このことから、すべてではないが、(20)のタイプについては、1 節で述べたように、もとの V が表す事象を、異なる視点から述べる述語に変換する目的で複合語が形成されていると考えられる。すなわち、本来「入れる」「当てる」は位置変化を表すのだが、対象項(Theme)と複合すると、場所項への働きかけに焦点をあてた意味を表す動詞に変化しているということである。格標示については、(26)のような変化を見せない「気配り」「手だし」「肩入れ」などについても、同様の意味の変化が観察される。

(19)のタイプについては、目的語と複合した結果、満たすべき内項は残っておらず、完全自動詞に変わっている。(5)で示したように、一般に V が目的語 1 つしかとらない場合、その項と複合すると「する」が直接結合できる動名詞にはならないので、これは身体部分

[5] この違いが格表示の違いとどのように関わるかという問題については今後の課題とする。

名詞との複合の特徴とも考えられる。この問題については、由本(2010)では詳しく考察していないので、次節で取り上げ、新たな見解を示したい。

4. 内項をとらない「身体部分名詞＋動詞連用形」型の複合動名詞

この節では、他動詞が身体部分名詞との結合により結合価が減じられ、項をとらない自動詞に変化している(28)（(19)の再掲）のような複合動名詞について考察する。

(28)　骨休め、骨惜しみ、舌打ち、舌なめずり、足踏み、足馴らし、腕組み、腕まくり

ここで、2 節で見た先行研究に照らして、このタイプの[N+V]型複合語が形成される目的について考えてみたい。先述のとおり、これらはいずれも N が V の唯一の内項である (5)と同じタイプだから、本来は動名詞用法が容認されないはずである。さらに、Yumoto (2010)に従えば、内項を複合することにより形成される複合動名詞は、前節でも述べたように V が表す事象をもとの動詞とは異なる観点から叙述するものになるのが一般的である。たとえば、「A に B を付ける」が B の A への位置変化を表すのに対して、「A に B 付けする」では、A の状態変化に焦点のある表現となっている。しかし、(28)については、もとの V と形成された動名詞が表す事象の間に、このような意味の違いは感じられない。したがって、Yumoto (ibid.)で提案した複合動名詞形成の動機付けは、(28)の例には当てはまらないと考えられる。

(28)の[N+V]型複合語に共通するのは、動名詞としての語彙化の程度が高く、対応する句ではパラフレーズができないものも多いということである。「骨を折る」には物理的な意味と比喩的な意味があるが、複合動名詞になると後者の意味しか表せない。「腕を組む」には両腕を組むことと他人同士が腕を組み合わせることという 2 つの意味があるが、「腕組みする」には、前者の意味しかない。また、「舌打ちする」というのは、実際に舌を打つ場合もあるだろうが、いまいましさを表す慣用句として定着しており、対応する句表現「舌を打つ」が使われることはほとんどない。「足踏みする」も、「足を踏む」にパラフレーズすることはできない。そこで、由本(2010)では、このタイプは慣用句としてレキシコンに登録されており、2 節の(20)のタイプと同様、(22)のように分析できるとしていた。しかし、(28)で用いられている身体部分名詞の意味は、(20)のタイプのように比喩的意味拡張を起こしているものばかりではない。「舌打ち」「舌なめずり」「腕組み」などにおける N は、実際の身体部位を表すものとして解釈してよいだろう。先述の「腕を組む」と「腕組みする」の意味の違いを表すためにも、主語による語彙的束縛は必要だと考えられる。すなわち、複合動名詞の LCS は(29)のように表されるべきだと考えられ、その結果、文レベルにおいて、主語と複合語内の名詞との間に束縛関係があることになってしまう。

(29) 腕を組む⇒腕組み（する）:

$[x]^{\alpha}$ CAUSE $[[ARMS]_i^{\alpha}$ BECOME $[[ARMS]_i$ BE AT-[FOLDED]]]

本稿では、このような本来は認められないはずの束縛関係を生じる複合は、一種の再帰動詞の形成を目的として、慣用化の程度が高いものにのみ許されていると考えたい。自身の身体部分を対象とする行為を表す場合、ロマンス系言語では、本来他動詞であるものをいわゆる代名動詞にすることによって表す場合がある。フランス語では、接語と分析されている se を必ず伴う動詞になる（e.g. se laver （体を洗う）, se coucher （横になる）, s'habiller（服を着る）, se croiser les bras （腕組みをする）, se raser（ひげをそる））のである。

また、英語では以下のように本来再帰代名詞や身体部分名詞を目的語に表すべきところ、それらを表さず自動詞として用いることが可能な場合がある（Cf. Levin 1993: 34-36）。

(30) a. Jill dressed herself hurriedly. / Jill dressed hurriedly.
Tom bathed himself in water. / Tom bathed in water.

(31) a. Shohei waved his hand at the crowd. / Shohei waved at the crowd.
b. John nodded his head in agreement. / John nodded in agreement.

日本語では、このような構文交替はほとんど観察されないが、代わりに(28)のような複合動名詞形成によって再帰性を表していると考えられる。すなわち、自身の身体部分を対象とする行為は、他者への働きかけではないため、自動詞として表すのである。ただし、いずれの言語においても、このような「自動詞化」は慣用化の程度が高い限られた表現においてしか認められないようである。

5. 結語

本稿では動名詞として用いられ得る[N+V]型複合語のうち、N が身体部分名詞であるものについて、タイプ別にその特徴とそれぞれの形成の目的について考察し、以下のように 4 つのタイプがあることを示した。

(i) もとの V の意味をより特定した動詞概念を作る目的で、N が修飾要素として V の LCS に挿入されるもの。

(ii) V の意味を基盤として V の結合価を変えずに新たな動詞概念を作る目的で、N が項として V の LCS に挿入されるとともに、N のクオリア構造から新たな項を受け継ぐもの。

(iii) 3 項動詞の場所項の変化に焦点をあてた動詞概念を作る目的で、対象項である N が複合されているもの。N は、身体部分名詞であっても実際の身体部位ではなく比喩的意味を表し、LCS において関係名詞としての束縛解釈を受けないものに限られている。

(iv) 一種の再帰動詞を作る目的で、2 項動詞の項としての N が複合されているもの。

このうち、(iii) (iv)は、N が身体部分名詞の場合に特徴的なものであり、特に興味深い。本稿の観察が示した身体部分名詞が関わる語形成の特性から、レキシコン研究において身体部分名詞が特別な扱いをうけるべきものであることが明らかになったが、語彙意味記述において、これをどのように分析するのが適切であるかについては、さらなる検討が必要である。今後の課題としたい。

主な参考文献

伊藤たかね・杉岡洋子　2002.『語の仕組みと語形成』　東京：研究社.

Levin, Beth.　1993．*English Verb Classes and Alternations.* Chicago: The University of Chicago Press.

西川賢哉　2013. 「「NP_1 の NP_2」タイプ F:　譲渡不可能名詞 NP_2 とその基体表現 NP_1」西山佑司（編）『名詞句の世界』65-82. 東京：ひつじ書房.

Pustejovsky, James.　1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

Sugioka, Yoko. 2002. Incorporation vs. Modification in Deverbal Compounds. *Proceedings of Japanese / Korean Linguistic Conference 10,* 496-509, CSLI.

由本陽子　2010.「身体部分を表す名詞を結合した日本語の[N+V]複合語について」 宮本陽一(編)『言語文化共同研究プロジェクト 2009: 自然言語への理論的アプローチ』89-98. 大阪大学大学院言語文化研究科.

Yumoto, Yoko. 2010. “Variation in N-V Compound Verbs in Japanese,” *Lingua* 120, 2388-2404.

由本陽子　2020. 「日本語の「名詞＋動詞連用形／形容詞」型複合語形成における「形質名詞」の役割」由本陽子・岸本秀樹（編）『名詞をめぐる諸問題：語形成・意味・構文』 47-67. 東京：開拓社.

執筆者紹介（掲載順）

越智正男（OCHI, Masao）
人文学研究科言語文化学専攻　理論言語学・デジタル
ヒューマニティーズ講座
山田彬尭（YAMADA, Akitaka）
人文学研究科言語文化学専攻　理論言語学・デジタル
ヒューマニティーズ講座
ヤンムイ（YANG, Muyi）
人文学研究科言語文化学専攻　理論言語学・デジタル
ヒューマニティーズ講座
由本陽子（YUMOTO, Yoko）
大阪大学　名誉教授

（2024 年 4 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2023

自然言語への理論的アプローチ

2024 年　5 月 31 日　発行

編集発行者
大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻